

平成30年度第1回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

日時：平成30年8月3日午後3時～午後4時30分

場所：マスマニチュアル生命ビル 7階会議室

○議事録

- 1 開会
- 2 教育委員会挨拶
- 3 関係者紹介
- 4 委嘱状交付
- 5 議事 「熊本市小中一貫教育の在り方について」

古賀座長	本日は、熊本市小中一貫教育のあり方について、まず、事務局より内容説明をいただき、今後の方向性についての意見交換をしたい。
事務局	事務局から説明（下の①～③についての説明、詳細省略） ①小中一貫教育のメリット、②平成29年度の経過、③今後の予定
古賀座長	国が進めている「小中一貫教育制度」というのは、義務教育学校という形と小中一貫型小中学校という形の2つのタイプがある。本検討委員会では、今年度から制度的に学校をどうするかという議論に入る。唐突な感じがされるかもしれないが、5年間試行錯誤しながらやってきた結果であり、決して唐突ではない。
多賀委員	昨年までの富合小と富合中のように教育課程の特例的な措置はあるのか。
事務局	小中一貫校になった場合は、カリキュラムの自由度がかなり認められる。例えば、中学1年生の学習内容を小学6年生で学習するカリキュラムを作成することも可能である。
古賀座長	国は「小中一貫教育が当たり前」というスタンスであり、小中一貫校の教育課程についてはかなり柔軟である。新しい学習指導要領で示された「カリキュラム・マネジメント」という言葉が、まさにそれに当てはまる。
磯田委員	昨年度の本会議での意見が反映されていて、保護者の意見も反映されているという感想をもった。Bグループ、Cグループのカリキュラムがどういった形になるのかは関心があるところだが、難しさもあると思う。
谷口委員	私が住んでいる校区はBグループになるので、どのようなカリキュラムになるのかが気になる。この資料だけでは具体的に見えてこないところがある。
事務局	小学校から中学校へ移行する時に、不安を感じたり、つまずきを覚えたりする子どもたちがおり、より滑らかな接続が求められている。カリキュラム自体の問題もあるが、小学校と中学校の職員の意識の違い、学校文化の違いというものもある。小中一貫のカリキュラムを作成することが目的ではなく、小学校の職員と中学校の職員が協力してカリキュラムを作ることが大切である。小中の教職員が9年間で子どもをよりよく育てるという意識をもち、「目指す子ども像」を共有することが大切である。
事務局	説明の中で使用したカリキュラムについては、2種類のカリキュラムがある。6ページの小中連携カリキュラムと、教科のカリキュラムを説明した7ページ

	のところである。9年間の小中一貫カリキュラムでは、A・Bグループにしか印をつけていないが、ここは教科の中のカリキュラムのことで、例えば、総合的な学習の時間、人権学習など、教科内容にまで踏み込んだカリキュラムのことである。一方、学習や生活のルールを共有して共通実践するという項目があるが、これはどの学校でも取り組んでもらうカリキュラムのことである。
古賀座長	2つのカリキュラムがあると困難を招く。そこで、Bグループのところには「小中一貫カリキュラム」という言葉を使い、Cグループのところには「小中連携カリキュラム」という言葉を使うとよい。つまり、ホップ、ステップ、ジャンプでいうと、連携カリキュラム、一貫カリキュラム、一貫型小中学校、と説明された方がわかりやすいと思う。そういう形に修正するが、よろしいか。
小田委員	連携カリキュラムについては富合独自のものがある。先生方がこれを意識しているんな話ができるところがよい。特別支援教育や生徒指導などで活用している。富合では4教科が小学校へ乗り入れ授業をおこなっているが、一貫カリキュラムのところまで踏み込んでいないので、今後やっていきたい。
多賀委員	連携カリキュラムに関しては、幼稚園、保育園の部分は入れないのか。以前勤務した学校では、保育園も含めたカリキュラムを作成していた。作成には、PTA役員と職員が協力し、家庭生活に関わることも含めていた。職員は数年すると代わってしまうので、学校だけでなく地域を取り込んだカリキュラムの方がよい。
事務局	幼稚園、保育園に関しては、一昨年に作成したスタートカリキュラムを活用いただいている。
古賀座長	小学校と幼児教育との連携は、新学習指導要領改訂の目玉みたいところがある。2年前に、小学校の側からはスタートカリキュラム、幼稚園の側からはアプローチカリキュラムとして、つながるように形を作った。今年度から幼稚園教育要領が変わったので、それにともなって、小学校側の受け皿として生活科と図画工作あたりが窓口となり、連携していく方向性が提示されている。今取り組んでいる幼保小連携の充実も考えておくというのが市教育委員会のスタンスではないか。もう一点、地域との連携については、熊本市スタンダードにあるように、熊本市の場合は徳・知・体で作っているが、「地域の一員」は大事な部分である。そういう意味では、挨拶も大事だが、地域とどうコミュニケーションをとっていくかというのもそれぞれの学校の実情に応じて重要である。
橋爪委員	平成26年度から今年度まで、検討委員会が検討してきた中で、モデル校指定研究をしてきた。これまでの全ての取り組みを踏まえて、Aグループは次年度から、小中一貫型小中学校への移行を視野に入れる。これまで長く検討ばかりしてきたが、例えば、小中一貫カリキュラムは、教科のところまで踏み込むのか、教育課程も含んだところまでするのか、学校現場の意見を聞きたい。 それから、それぞれの小学校で教科担任制は可能か、技能教科が兼任という形になっているところがあるが、コーディネーターは誰がするのか、一貫カリキュラムをどの辺まで望んでいるのかなど、説明してほしい。
事務局	一貫カリキュラムについては、例えば、算数・数学とか教科の部分に踏み込んでいただければありがたいが、もしその場合には指導課もカリキュラム作りに一緒に入らせていただくというイメージをもっている。人権学習や総合的な

	学習の時間のカリキュラムを核にするのがスムーズと考えている。結局、小中一貫型に移行していただく最大のメリットは人的な融通性、カリキュラムの自由度だと考えている。
本田委員	楠中、楠小、楡木小では、「熊本市スタンダード」をもとに、楠スタンダードを作っている。あいさつと聴く姿勢を中心に取り組んでいる。特に、楠校区は学力充実に取り組んできたので、学び方、特に「めあて」と「振り返り」をしっかりさせ、授業スタイルを共通させるところから学力の定着を図っている。
橋爪次長	1小1中は、中学校の技能教科への兼務が出しやすく、小学校へ行く場合が多い。コーディネーターは実務的には誰なのか。
中西委員	兼務については、技術と音楽の教科担当2人が河内中と兼務をしている。技家と音楽。兼務が小学校と組み合わせさせていたら、もっとやりやすい。コーディネーターについては、中学校が主体的にコーディネートする予定で、現在は校長がその役を務めている。
小田委員	英語、音楽、家庭科、美術の4人が乗り入れ授業を行っている。デメリットは4人が担任をすることが難しいところである。学級担任が乗り入れ授業を担当すると、学校にいてほしいときに小学校へ行っているということがある。また、連携をするには打合せ時間が必要になり、人的支援も必要になる。サポートがなければ先生方の負担だけが増えることになる。制度化については、地域も小中一貫は当たり前という感じはある。
松野委員代理	地域の特色を取り入れた総合的な学習の時間のカリキュラムを作成している。幼小中合同で行事を行ったり、9年間を見通した取組はできている。乗り入れ授業はできていない。今は、コーディネーターを校長がしているが、研究主任の方がいい。コーディネーターの位置づけは重要である。
古賀座長	平成31年度から実際にできるかについて、意見を聞いてきた。その他のご意見はないか。
事務局	モデル校と富合小中学校に行き、ヒアリングを行ってきた。富合小中学校は学校としては来年度からでも可能ではないかという考えがある。芳野小中学校は現在でも合同行事を行っており、学校としてはいつでもよいと言われている。江南小中学校、河内小中学校についても、来年かどうかは分からないが、いつかは一貫校に移行することが望ましいと受け止めている。託麻東小学校、二岡中学校は現状では一歩踏み込めない印象である。富合小中学校、芳野小中学校は来年度の移行をぜひお願いしたい。
中西委員	芳野小中学校は他校に比べて、生徒数は少なく、小規模校である。合同運動会は10年前から行っている。集団登校、危険箇所点検、避難訓練等も合同で行っている。また、芳野小中版連携カリキュラムもすでに作成している。合同校内研究も行っており、総合的な学習の時間を中心とした連携カリキュラムをつくりたい。
古賀座長	これまで5年間くらいを振り返ると、小中連携では外国語活動が多かった。外国語活動は1つの柱になる。保護者の期待も大きい。平成16年度に小中一貫の特例校ができたとき、全国で9割の学校が英語を希望していた。小中一貫の

	成果の見せ方というところでは、そのあたりのことも必要なかと思う。また、市には5区あるので、平成31年度から各区に1つずつ小中一貫校ができればと思う。
塩津委員	小中一貫への意見は、P T Aの中で話題になるか。
磯田委員	P T Aの常任委員会などでは、報告があるため話題にでているが、単P T Aではまだ意見としてはでていない。
古賀座長	平成29年11月、玉名郡和水町の三加和小中一貫教育研究発表会に参加したが、小5の国語の公開授業で短歌を扱っていた。小学校の担任の先生が主導し、中学校の国語の先生が専門的な見地からアドバイスをしていた。また、子どもたちのために、授業で取り上げられた短歌の背景となる「秋」の絵（鹿、草木）のパネルを中学校の美術の先生が作って教材として提供していた。Cグループの連携もこのような取り組みをすると素晴らしい取組になる。

6 事務連絡

7 閉会